

とき移り、ひと替われども

立処 真

青山ライフ出版

目次

序章		3
第一章	受難の軌跡	39
第二章	心の声の赴くままに	53
第三章	転機	91
第四章	心を通 ^{かよ} わせて	145
第五章	コンドルの眼	171
終章	インカの涙	205

序
章
我が心のアンデス

I

「ただ今、校長先生からご紹介いただきました清水真弓です。このたび縁あって、この日本人小学校の音楽教師として赴任してきました。何分にも……」

講堂の壇上に立った真弓の、満開の牡丹の大輪の花のような際やかな美貌きわと美声に、居並ぶ生徒の間からどつと感嘆のどよめきが沸いた。それもそのはず、ほんの一年前までは彼女は「秋月きらら」という芸名の、宝塚少女歌劇団雪組の次期トップスターの最有力候補のタカラジェンヌだったとなれば、子供心にもその美しさに打たれるのは当然の成り行きといえた。

日中戦争の勃発に向かつて、きな臭い暗雲が日本に立ち込め始めた一九三七年（昭和十二年）四月。南米ペルーの首都に十七年ほど前につくられたりマ日本人小学校に、慣れない教師役に緊張で頬をほんのり染めた新任の真弓の姿があった。

「私は音楽と踊りが大好きです。皆さんもきつとそうだと思います。こんなに元気で明るい皆さんとこれから一緒に過ごせるのが、とても楽しみです」

自分を奮い立たせるような口調に未だきこちなさが残る真弓の、それは精一杯の初対面の自己PRだった。

* *

一八九九年四月三日に、海外雄飛を夢見て日本から南米に渡った最初の集団移民七百九十人が、佐倉丸でペルー国カヤオ港に到着した。以来、忍耐強く働き者で進取の気象に富む日本人移民は、海岸沿いの砂糖きび大農園での働き手として幾多の艱難辛苦に耐え、やがてより豊かな明日を目指して農村から都市部へと生活の場を移しつつ、ペルー社会に着々と地歩を固めていった。

そして事業拡大に伴う呼び寄せ移民を次々と迎えて、一九三〇年代には全ペルーの在留邦人が二万人以上に上り、「リマ市民の十人に一人が日系人」といわれるまでの隆盛を示すに至る。

そういう懸命な努力の過程で、子弟の教育に熱心な彼らが自らの資金を持ち寄って学校を立ち上げ、日本の文部省の選定教科書を取り寄せて、日本から招いた教員による本国と同等の教育の場を作り出したのは、その繁栄ぶりと志の高さを写し出す好例だ。

第二次世界大戦勃発前までにそうして設立された日本人学校がペルー全体で累計五十を数え、真弓が赴任したその代表的存在ともいえるリマ日本人小学校は、最盛期には千六百人の生徒数を記録している。

(ここで一から出直そう。無限の可能性を秘めたこの子たちのきらきら輝く瞳から、たくさんの元氣をもらってなんとか生まれ変わらなきゃ……) 夢と希望に満ち溢れていた彼女

の過去をよく知る者がいない異国の新天地で、華やかなタカラジエンヌの世界に背を向けて地味な教師の道を歩もうと、はるばる海を渡った真弓は、そう心に誓った。破天荒な彼女の決断。その裏に、一体何があったというのだろうか……。

* * * *

「どうですか、清水先生。ここでの仕事にも大分慣れてきたように見えますが……。あなたのお陰で子供たちが音楽の授業をとっても楽しみにするようになって、私も喜んでいますよ。あの口うるさい父兄たちからの評判も上々だ」

早いもので、真弓がこの地を踏んでからもう三ヶ月がたつ。そんなある日、定例の職員会議が終わると、剣持校長が真弓を手招きした。少し話したいということだ。

日本の複数の公立小学校の校長を歴任したという大ベテランの彼は、いつもオーダーメイドのダブルの背広に身を包んだ堂々たる押し出しの初老の人物で、教育者というよりはやり手の経営者という印象が強い。常に過大な期待を抱きがちな日系社会との間では何かと利害関係の対立が深刻で、一年以上の任期を全うした校長が稀だというこの学校で、もう三年目に入っている実力派だ。

「ありがとうございます。無我夢中でやってきたので、まだよく実感が沸きません。衣食住すべてにわたって暮らしがガラッと変わって、とにかくそれに少しでも慣れなくてはと、

ただその思いだけで」

「無理もないですね。周りを余裕を持つて見渡せるようになるには、やはりもっと時間が必要でしょう。私も最初はこの陰うつな自然環境には、本当にまいりました」

フンボルト寒流に洗われる海岸線沿いのリマでは、この季節に、海面と大気の温度差で終日ガルúaと呼ばれる海霧が立ち込め、来る日も来る日もどんよりした曇天と強い湿気が住民を悩ませる。下宿と学校をひたすら往復する日々を送ってきた真弓には、それを特段意識する余裕もなかったが、改めて思い起こせば、確かに気が晴れない日々だったことの原因の一つにガルúaがあつたような氣もした。

「ところで、前々からいろいろと考えていたんですが、ここの校風をもっと明るく楽しいものに変えるにはどうしたらいいんだろうかと……。それで思い付いたのは、音楽の果たす役割がとても有効なんじゃないかと。そう、ちょうどあなたのような誰もが注目する題材を得たので、これからもつと音楽活動に力を入れていくべきではないかと……」

「まだ始めたばかりで分からないことが多く、とても私一人では自信が……」

いきなりの大役への期待を校長から仄めかされて、急に古傷が疼くような感覚に襲われ、真弓の心に不安がこみ上げた。

「いや、そんなに難しく考える必要はないんですよ。初めは音楽クラブのような課外活動の場を増やすことから考えていけば……。将来的には久しく中断している学芸会の大々的な復活もいいんじゃないかな。歌劇でも演じられたら最高だ」

（えつ、この人は何を考えているのか……。好きな音楽を静かに子供たちに教えられればと、ただそれだけを願って私はここまでやってきたのに……）

自分の学校経営の手腕を日系社会にさらに売り込む、という校長の隠れた野心の道具に利用されようとしていることには考えが及ばずに、真弓はただうたえた。

「もつと考える時間をいただけませんか……」

「よく考えておいてください。それと……。そう、話は変わりますが、ここで生活する以上、あなたもこれからはもう少し、この国のことを勉強する機会を積極的に活用したほうがいいと思いますよ。」

手始めに、日系社会の面々と交流を深めて、彼らの生活の知恵を教えてもらったり、彼らがどういう苦勞をして今日に至っているかなどの話を聞くのは、とても大切なことです。郷に入れば郷に従えと言いますが、スペイン語ができない我々には、まず衣食住のよ
うな生活の基盤を整える面からも、彼らの助けはとても貴重です。

聞くところによれば、あなたの評判を耳にして何人もの有力者が、夕食に招待して話をしたいと申し出ているそうじゃないですか……」

「……」

確かに真弓は、そういう申し出をことごとく断ってきた。まだこの国についてよく知りたいという気持ちはさほど強くないし、また、そういう晴れがましい席で興味本位の目にさらされるのには、とても耐えられるような心境にはないからだ。

どこへ行っても、才能があつてうら若く美しい彼女のような存在を、周りが放つてはおか
ない。たとえ地球の反対側の新天地でも。ふと、かつて覚えたような言い知れぬ息苦し
さを感じて、真弓は思わず喘ぐように深呼吸をした。

II

「こ、こんな、根も葉もないウソを、どうして……」

そう言ったきり両手で顔を覆うと、真弓は泣き崩れてその場にしゃがみこんでしまった。
自分と関西財界の大立者との不倫スキャンダルを、大手新聞社が創刊した週刊誌がスクー
プとして大々的に報じたからだ。

一九三一年（昭和六年）に十五歳で、憧れの宝塚音楽学校に入学を許された清水真弓。
それから天性の美貌と声楽家である母親譲りの美声、そして抜群の身体能力に人一倍の努
力が加わって、二十歳の今では、少女歌劇団雪組の次期トップスターと目されるまでに成
長している。

秋月きらら名のこのタカラジエンヌのファンは、劇団始まって以来の最多といわれてお
り、取り巻きや追っかけとの騒々しい日々も、人気ゆえの賑わいだった。

「落ち着いて、きらら。こんなでたらめな中傷記事に惑わされちゃ駄目よ。私たちはみんな